2018.09.05

ハゲタカジャーナル

小嶋祥三

ネットのニュースに「ハゲタカジャーナル」の記事が載っていた。英語では Predatory Journal という。要するに、ロクに査読もせず金を支払えば掲載するオープンアクセスの雑誌のようだ。掲載料の明示がなかったり（後に高額の費用を請求され、トラブルになる）、ニセの impact factor を表示していたり等々と、トンデモない雑誌である。わたしは 2010 年ころには研究をやめたので、オープンアクセスの雑誌のハシリしか知らないが、今やその数は 1000 を超えるらしい（Beall という人のリストをみたが、あまりの多さに驚いた）。

雑誌に論文を投稿して、査読者とのヤリトリは不満や苦痛など負の情動を引き起こしやすいので、金を払えば載せてくれる雑誌は魅力的である。そこからこの種の雑誌を業績稼ぎに利用しようとする研究者が出てきてもおかしくない。そのニュースによると、中国のある出版社は 320 の雑誌を発行し、この 15 年で 84000 本の論文を掲載した。そのうち 5000 本を超す論文が日本絡みだという。1st author が大学・研究機関に所属するものは 3972 本：九州大 147，東京大 132，大阪大 107，新潟大 102，名古屋大 99，日本大 87，北海道大 74，広島大 73，京都大 66 本。嗚呼、恥ずかしい。

中国の一出版社でこの有様なので、世界的にみたらもっとひどいことになっているだろう。一人で多くの論文を投稿した九州大の先生は中国からの留学生の求めに応じたという。しかし、それによって研究者、教育者としての矜持を捨ててしまったことを忘れてほしくない。このような歪んだ大学の「国際化」はロクな結果をもたらさないだろう。